

ネヘミヤ記8章9－12節 「主の喜びは力なり」

1A 御言葉による罪の自覚

1B 解き明かしによる理解

2B 自分に語られた言葉

2A 悔い改めに導く悲しみ

1B 世の悲しみ

2B 神による悲しみ

3A 悲しみの後の喜び

1B 悔い改めた後の喜び

2B 幸せとの違い

3B 交わりにある喜び

4A 喜びの力

1B 罪による重み

2B 御霊の内なる働き

本文

ネヘミヤ記 8 章を開いてください。午後に私たちは、7 章から 9 章を学びますが、今朝は 8 章 9-12 節にある出来事に注目したいと思います。

9 総督であるネヘミヤと、祭司であり学者であるエズラと、民に解き明かすレビ人たちは、民全部に向かって言った。「きょうは、あなたがたの神、主のために聖別された日である。悲しんではならない。泣いてはならない。」民が律法のことばを聞いたときに、みな泣いていたからである。10 さらに、ネヘミヤは彼らに言った。「行って、上等な肉を食べ、甘いぶどう酒を飲みなさい。何も用意できなかった者にはごちそうを贈ってやりなさい。きょうは、私たちの主のために聖別された日である。悲しんではならない。あなたがたの力を主が喜ばれるからだ。」11 レビ人たちも、民全部を静めながら言った。「静まりなさい。きょうは神聖な日だから。悲しんではならない。」12 こうして、民はみな、行き、食べたり飲んだり、ごちそうを贈ったりして、大いに喜んだ。これは、彼らが教えられたことを理解したからである。

私たちはネヘミヤ記を通読していますが、前回の学びでついに城壁が完成したところまで読みました。神の民の守りがしっかりと行われます。そしてネヘミヤはそれだけでなく、しっかりと神の民を堅くする働きを行います。城壁の門をしっかりと守らせ、改めて系図を調べさせ、自分たちが神の残りの民であることを確認させます。

1A 御言葉による罪の自覚

そして、驚くべきことが起こります。イスラエルの民のほうから自主的に集まり、学者エズラによってモーセの律法を持ってくるように頼んだのです。男も女も、文章が理解できる年齢に達している者たちがみな集まりました。そして、広場でエズラは夜明けから真昼まで、これを朗読しました。干からびた魂に、神の言葉の水が溢れるまで注がれていきました。

1B 解き明かしによる理解

エズラは、ただ律法を朗読したのではありません。他の祭司やレビ人が、エズラが読んだ律法の箇所を、民に解き明かしたのです。「彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。(8:8)」とあります。そして、理解したので彼らは大いに喜んだと 12 節にありました。御霊によって、神の御言葉がそれぞれの心に開かれて、それで心に喜びをもたらしました。

私たちの教会に、ある時、以前、ユダヤ教に改宗したという兄弟がいらっしゃいました。ユダヤ教の改宗者なのですが、それからイエスを自分のメシヤとして受け入れたという方です。この方が、礼拝の聖書を一節ずつ読んでいく礼拝に集われました。そして彼は、「心が喜んだ。かつてのシナゴグ時代を思い起こす。」と言われたのです。そうです、律法を朗読して、それを明瞭に語り、そして説明を加えて読んでいくことは、新約時代のユダヤ教の会堂にも見ることでできる習慣です。イエス様が律法を開き、解き明かされました。使徒パウロも同じことをしました。

エペソにある教会に、テモテが牧者となっていた時、律法や系図についての枝葉末節なところで議論していた者たちが入り込んできた時、パウロはテモテにこのように命じました。「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。(1テモテ 4:13)」「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。(2テモテ 2:15)」聖書の言葉を通読し、通読するだけでなく、しっかりと朗読し、説明を加えながら朗読するのです。

この時に、神の聖霊は私たちの心に働いてくださいます。「御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(1コリント 2:13)」とパウロは言いましたが、聖書の言葉は聖霊によってそれぞれの著者に与えられ、そしてそれを解き明かす者も聖霊によって解き明かします。そして、聞く者たちも御霊によって、その言葉を理解するのです。

このことを行なわれた第一人者は、他でもない、私たちの主イエスご自身です。二人の弟子が、エルサレムから離れてエマオという村に行く途中でした。復活されたイエス様がついて行かれました。そして二人は、暗い顔つきになっていました。十字架にイエスが付けられて、それで仲間の何人かイエスが生きておられると言っている、というのです。そこでイエス様が言われました。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、その

ような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。(ルカ 24:25-26)」彼らは、預言者たちの言うことは聞いてはいました。そして信じてもしました。けれども、その全てをそのまま信じていませんでした。心の中で取捨選択をしていたのです。信じるものと、そうでないものを取捨選択していたのです。

そこで、「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。(24:27)」とあります。聖書全体から、モーセの律法から始まり、預言者に至るまで、つまり創世記からマラキ書に至るまで、ご自分についての事柄を説き明かされたのです。その話を聞いていた弟子たちが、この方がイエス様だと分かった時に、その時にイエス様は見えなくなりましたが、こう言いました。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。(24:32)」心が燃えてきました。かつての主と共にいた喜びが取り戻されました。律法の解き明かしによって、彼らは理解し、そして喜びに満たされたのです。

2B 自分に語られた言葉

このことによって民に大いなる喜びがありました。彼らは単に、自分たちの先祖たちが犯した過ちを聞いていたわけではありません。律法の中に、神がイスラエルに良くして下さったのに、イスラエルは神に背いて、罪を犯しました。先祖たちの過ちを昔の事柄としてではなく、まさにそれを自分たちが行っているのではないか、律法に書かれていることをまるで行っていない、自分は神に背いているのだ、と気づきました。これが律法の働きです。「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。(ローマ 7:12-13)」

私たちは、神の御言葉を他の人々の話のままにしておくことをしばしば行います。あの時代の人々の過ちなのだとしてしまうことはよくあります。それだけでなく、今の私たちであっても、自分ではない他の人たちの過ちであると感じることはとても易いことです。けれども、自分自身に当てはめることを避けています。他の人々のことはよく気づき、自分自身のことには気づかない姿をイエス様はよくご存知で、このように言われました。「また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。(マタイ 7:3-5)」私たちが兄弟の目に塵があるのに気づいている時、実は自分の目に梁があるのに気づいていない、ということです。

ですから、神の言葉を聞くときに、私たちは罪の自覚が与えられます。この自分こそが、過ちを

犯していたのだ。自分にこそ肉の弱さがあるのだ、という悟りが与えられます。それでエズラの読む律法によって、民の心は悲しみに満たされ、泣いていたのです。

2A 悔い改めに導く悲しみ

罪の自覚によってもたらす悲しみについて、使徒パウロは二つの悲しみがあることを教えています。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。(2コリント 7:10)」神の御心に添った悲しみと、世の悲しみがあると言っています。御心に添った悲しみは悔い改めを生じ、それによって救いに至らせませんが、世の悲しみは死をもたらします。

1B 世の悲しみ

世の悲しみにおいては、罪や自分の肉の弱さを悲しむ時、そのことを行なってしまったことで悲しんでいます。自分のした愚かなことで、自分が惨めな思いをしているから、自分のしたことの種を蒔いているから、それで罪を悲しんでいるのです。家庭内で言葉の暴力をふるう男がいるとします。妻は、もうこれ以上、我慢できなくなり、実家に戻りますと言います。すると態度が急に変わり、「申し訳なかった。謝る、どうか家に戻って来てくれ。」と言います。それで妻が戻ってくると、また同じことを繰り返すのです。

自分の気持ちの中で悪い思いになっているから、ごめんなさいと謝っているのであり、本当に思いを変えているのではないのです。あるいは相手が自分のことを悪く思うかもしれないと思って謝っており、自分を守るために謝っています。ですから状況が良くなれば、また同じことを行います。自分では、「私は良くなった」とその謝罪を繰り返しているのでも思いこんでいるのですが、相手や周りの人々は何も変わっていない自分を見ているのです。

2B 神による悲しみ

神による悲しみは、悔い改めを伴います。自分が神に対して罪を犯したことを知ります。そして、そのことを悔いて、悲しみます。その罪を神に対して告白して、捨てます。こうした悔い改めが生じるのが、神による悲しみです。

3A 悲しみの後の喜び

ネヘミヤ、エズラ、またレビ人たちは、悲しんでいる彼らを見て言いました。「きょうは、あなたがたの神、主に聖別された日である、悲しんではならない。泣いてはならない。」そしてネヘミヤは、「行って、上等な肉を食べ、甘いぶどう酒を飲みなさい。何も用意できなかった者にはごちそうを贈ってやりなさい。」と言いました。「自分は主が行いなさいと命じられていたことを行なっていなかった。主よ、ごめんなさい。」と真実に罪を悲しんでいた民を見て、その御霊の働きを見て、ネヘミヤはごちそうをもって喜ぼうではないか、と呼びかけたのです。

1B 悔い改めた後の喜び

神のもたらす悲しみは、その悲しみが目的ではありません。先ほど読んだように、悔いのない、救いに至る悔い改めが悲しみの目的です。真実な罪の悔い改めは、必ず喜びをもたらします。私たちはその時に、いつまでも悲しむ必要はありません。悔い改めた者には、神は惜しみなく憐れみを注いでくださり、その罪をきれいに拭い去ってくださいます。ですから、喜びが溢れます。そして、イエス様ご自身が喜んでくださり、いっしょに食事をするのです。

ラオデキヤにある教会に対して、イエス様は食事を用意されることを約束されました。「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。(黙示 3:19-20)」イエス様が、罪人や取税人と食事をされた時のことを思い出してください。パリサイ人は、取税人や罪人となぜ食事をするのかとつぶやきました。それでイエス様は言われます。「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。(ルカ 5:32)」悔い改めた者とは、イエス様は親しく関わってくださるのです。

そこにある喜びはかけがえのないものです。ダビデは言いました。「あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。(詩篇 16:11)」使徒ペテロは言いました。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。(1ペテロ 1:8)」

2B 幸せとの違い

さて、喜びというのは霊的なものです。しばしば誤解されるのは、「幸せ」と「喜び」の混同です。幸せな気分になることが、喜んでいるものではありません。幸せな気分は自分の感情に基づくもので、周りの状況に左右されるものです。しかし喜びは、周りの状況ではなく、神との関係に基づくものです。私の喜びが感情であったのならば、おそらく朝から喜びなきクリスチャンでありましょう。朝起きたら、血流が回っていないせいか、しばらく、ぼうっとなって布団をなかなか上げられていない姿を私の妻は毎日見えています！

幸せは状況に拠りけりです。喜びは持続するものであり、内から溢れるものです。これを赤ん坊と母親との関係に当てはめればよいでしょう。赤ん坊は、何か少し不快になれば気分を害して泣きます。数秒前は泣いているのに、今は笑っている。時には泣いているのと笑っているのを同時にする芸当を持っています！しかし母親はどうでしょうか？彼女は、彼女の感情は否定的なものが多いです。夜中にお乳のために起きる時は眠い。赤ちゃんが泣くときはうるさい。時々、にこやかになるので嬉しくなります。けれども、その喜びは持続的なのです。眠くても、赤ん坊に乳を与えているという喜びがあります。泣いていても、あやしている忍耐の中に喜びがあります。気持ちの上では辛くても、心にはその子への愛が自分を支えているのです。

ですから、私たちは悲しみながら喜ぶことができます。キリスト者の葬儀がそのもっとも典型的な証しです。その人がいなくなったことは悲しいです。しかし、その人がキリストのうちにいる、天にいる、そしてキリストが戻ってこられる時に復活し、自分も引き上げられる。そこで共に会うことができます。この希望があるので喜んでいきます。栄えに満ちた喜びに満たされます。また、迫害などの試練を受けている時でさえ、私たちは喜ぶことができます(1ペテロ 4:13 等)。

そして、この喜びは誰も奪い去ることはできません。イエス様は、これから十字架につけらえるという時に弟子たちにこう語られました。「あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。(ヨハネ 16:22)」奪い去ることはできないのです。どんな苦境の中においても、キリストが自分の罪のために死なれ、葬られ、よみがえってくださったという喜びが自分の内にあり、これは誰も奪い去ることはできないものなのです。だから、ネヘミヤは「主を喜ぶことは、あなたがたの力であるから。(別訳)」と言いました。

3B 交わりにある喜び

イエス様は、私たちをご自身の交わりに招いてくださっています。その交わりの中で私たちの喜びが満ち満ちたものになると言われます。「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにある、あなたがたの喜びが満たされるためです。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。(ヨハネ 15:10-12)」イエス様は御父の戒めを守っている中に喜びを持っておられました。戒めを守るからこそ、御父との交わりを保っていました。そしてその喜びは、今度は私たちがキリストの戒めを守ることによって私たちも享受することができます。そして、その愛を互いに分かち合うことによって、そこにも喜びは留まります。

神を愛する者たちにとって、正しいことが分かっているが、いながらしないことがいかに苦しいことか分かるでしょう。「なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です。(ヤコブ 4:17)」しかし、神が言われたということだけでそれを行なう時に、私たちはそれで神に認められたということではなく、それで神との交わりを持っていて、喜んで喜ぶのです。

私は、ずっと抱えている罪がありました。東アジアキリスト青年大会で、日中韓の指導者のために祈る促しがありました。私は中国については祈れました。韓国のためにも祈れました。けれども、北朝鮮の指導者のためにはこれまで祈れませんでした。あれだけ人権蹂躪をしている国の指導者を許せなかったのです。「あの男を取り除いてください。」という祈りはしたかもしれませんが、神に立てられている指導者とは認められなかったのです。けれども、神が、上に立てられている者のために祈れ、と命じられます。だから、自分の理解や感情を置いて、主の前に出て行って祈りまし

た。すると、これまでにない、神が行われている何かを感じました。神の国が広がっていきたくらうという思いが与えられました。それで主を喜びました。

そしてイエス様は、祈りについても全き喜びを約束してくださっています。「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。(ヨハネ 16:24)」祈りをするとは、父なる神と子なるキリストとの交わりをしていることに他なりません。ご自身が愛してやまない私たちの祈りを、父なる神はキリストの御名によって聞いてくださるのです。それで私たちも、その愛を受けて喜びに満たされるのです。ですから、祈ってください。教会のために祈ってください。それはみなさんを喜びで満たす近道になります。

それでヨハネは第一の手紙でまとめました。「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。(1:3-4)」御父と御子の交わりによって、私たちの喜びが全きものとなります。

4A 喜びの力

1B 罪による重み

どうか、この喜びによって強められてください。悔い改めない罪、告白していない罪、捨てていない罪は私たちの魂に重石を載せて、押しつぶしていきます。この世の悲しみに沈ませていきます。「私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。(詩篇 32:3-4)」けれども、罪を言い表す時に、その重石を取り除けてくださり、解き放たれた霊は神をほめたたえ、喜びの声を上げるようになります。

2B 御霊の内なる働き

そして、主にあって喜びます。周りの環境がたとえどんなに悪くならうが、その環境の中で喜ぶものではありません。主にあって喜びます。主にある喜びで力を受けた預言者にハバククがいます。ユダの国が悪くなり、飢饉が来て荒れ果てている姿を見ながら、彼は喜びました。「そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。(3:17-19)」みなさんも、主にあって喜び勇むことができます。躍り上がることができます。そのような爆弾のような大きな力を、主の喜びには潜んでいるのです。